

事例レポート ①

札幌からの映像発信

有限会社コミュニカルネット代表取締役プロデューサー
(北海道大学大学院教育学研究科 修士2年)

江口 彰 氏

映画監督 (北海道情報大学情報メディア学科 准教授)

島田英二 氏

映画監督とプロデューサー。お互いの役割が果たせたとき初めて大きな仕事が達成できる。まだまだ底の浅い札幌の映像業界で、稀有なコンビネーションで生まれた映画がある。『銀杏の樹の下で』。北大のキャンパスで映画監督とプロデューサーが組んで初めて生まれた作品が、この10月30日から開催されるCLARK THEATER (クラークシアター) 2008で上映される。

単身米国修行を経て国際映画祭のグランプリ監督となった島田英二さんとキャリア教育の一環としてキャンパスから映像発信事業をプロデュースする江口彰さん。それぞれの異なる立場から札幌からの映像文化の発信について抱負を語っていただいた。

北大映画館プロジェクトとキャリア教育

江口 彰氏

眠っている映写機から映画館を復活

一昨年の2006年でした。映写機がクラーク会館に眠っていることを友人から教えてもらったのです。昭和40年代にはクラーク会館で映画が上映されていたのですが、映写技師がいなくなって、いつしか忘れられたと聞かされました。そのとき、クラーク会館で上映会が復活できれば面白いととっさに思いました。キャンパスが映像文化の発信基地になり、事業を立ち上げる経験を大学生と一緒にできると思っていたのです。そこですぐに動きました。映研などに呼び



かけ、実行委員会を発足。「北大元気プロジェクト※ 2006」にも採択され、外部から協賛を得ながら資金も工面し、その年の12月に期間限定で上映イベントを開催しました。一般の市民も含めて、初年度は780名、翌年度は1,082名もの入場者がありました。今年で3年目を迎えます。

映画館事業の“実践”がキャリア教育に

私は、映画の専門ではなく教育学や人材開発が専門です。本来の目的は、事業といった実践経験を通じ、大学生にキャリア的な発達を促すことです。実践的な経験といっても多種多様ですから、北大生にとってその種類や相性を考え、今回のプロジェクトはまさに格好のアイデアだと思いました。映画は「夢」がある分野であり、プロジェクトの規模や内容も大学生にはできる範囲だと何となく感じたのです。それと映像教育の発信はやはり大学などが中心に行うべきものですから、既存の映画館とは役割が違うものだと考えています。そして魅力的だったのは、何よりも誰もやっていない“学内映画館”だったということです。

私は、このプロジェクトの設立者として代表を務めていましたが、今はプロデューサーという立場で参画しています。2年目からはプロジェクトの企画運営を学生スタッフに任せ、学生から上がってくる企画書の駄目出しとリスクに関して面倒を見ています。

最初の立ち上げのときは、映画関係者の人たちに会い上映会を継続的にやっていくためのルールを引きました。映画を上映するのに権利者とのやり取りや、映写技術等のアドバイス、収入計画と支出計画など、大学生には未知の世界でしたから、事業経験者の私が原案を作り、協力者と学生のコーディネートをを行い、一緒になって考えて作っていきました。もちろん私だけの力だけではできませんから、優秀な学生メンバーと共に非常に楽しく仕事をこなし、なんとか成功したというところです。

プロジェクトは継続性が大切

事業ですから、学生スタッフには継続性を考えるために後輩の立場と引き継ぎ(後継者育成)を最近よく口にするようになりました。継続していくために、人材と資金への認識が重要になってきます。

クラークシアターは年に一度の期間限定でやってい

※ 北大元気プロジェクト：学内の活性化に特に貢献すると期待されるプロジェクトに対して、北海道大学が審査し、資金援助を行っている事業。2001年度から実施している。

て、学祭のように見えるかもしれませんが、しかし、そのための準備は大変なものです。既存映画館との違いを考えて、どういう作品を上映すべきか、上映する映画の選択だけでも大変な時間と頭を悩ませます。そして、映像権を買う、値段交渉をするというタフな業務をこなします。事業規模は今年度150万円で計画していますが、その3分の一強は映画の上映権に使います。協賛金、補助金と入場料でまかなっています。そのため大学の支援に採択された意味は大きいのです。これらの業務を後輩に引き継いで、さらにその世代の特徴を企画できるように育成する。こちらの方が大変な仕事で、難しいことです。今非常に苦悩しています。

この2年間で約1,800人の入場者がありました。大きな特徴の一つとして、コストパフォーマンスが高いということです。事業コストと社会的効果や集客数で考えますと、他の映画祭よりかなりよいと思います。単純に学生の人件費がかからないということなのですが、インセンティブが金銭でなくキャリア的な発達や夢などといったものに対して、このような事業へ取り組むパワーが素晴らしいと思います。これは意欲などの効果からも、キャリア教育の実践の場としての意味がはっきり出ているのではないのでしょうか。

大学と社会をつなぎ、映像文化の発信力に

これまでの活動で、実際に映像事業に関わるようになって、映像自体が教育の場面や社会でのコミュニケーションとして非常に大きな効果をもたらすということを感じるようになりました。今後は、キャリア教育の実践の場として、学生たちが自ら企画運営を継続してもらうこと、私は教育学の視点から客観的にこの事業の教育的効果を検証していく側に回ることです。

昨年11月には、島田英二さんと組んで、北大ロケで学生とプロとが一緒になって映画をつくりました。短編映画『銀杏の樹の下で』です。キャンパスの映像美が大変素晴らしくハートウォーミングな作品です。先日プレアデス国際映画祭でも日本代表作品として評価をいただきました。10月には、みなさんにもぜひクラーク会館で見たいと思っています。

私は、プロデューサーとして製作統轄をしました。出演者3人も北大生で、期待以上にやってくれました。今回製作から上映まで北大で完結する



『銀杏の樹の下で』ホームページ <http://snowbugs.jp/ginkgo/>

珍しい事例を作ることになります。映像の持つ社会的影響力は、これからどんどん大きくなっていきます。その一つが節目として3年目に訪れます。大学と社会とをうまくつなげることができる一つの成功事例として、そして映像文化の発信例として、さらに大学生の実践経験の場として広まっていくことを願っています。

札幌から短編映画でアカデミー賞を

島田 英二氏

退路を断って映画監督の道へ

大学・大学院で建築を学んだ後、南カリフォルニア大学 (USC) の映像ワークショップで映画制作を学びました。5週間で5本の映画を撮るという実践コースで、脚本を書き、スタッフと役者を集め、撮影して編集、発表するという、ハードスケジュールな中での映画制作で、道行く知らない人に頭を下げて出演をお願いしたこともありました。

ここで学んだことが僕の映画づくりの原点になりましたね。世界各国から勉強に来ていて、ハリウッドに自分を売り込むために来たという人もいる中、僕も同じように健全に？「映画監督になるんだ」と夢のようなことを言っていました (笑)。

当時は、学生最後の就職活動の時期で、周りの友人にも映画監督になると宣言して渡米しましたので、厳しい実践コースがつらくて帰国するというのもしたくなかったんです。変なプライドというか…、ただの意地ですね (笑)。でもこのワークショップの中で制作した僕の作品『hands』が、その後、アメリカン・ショート・ショートフィルムフェスティバル2001に入選し各国で紹介されました。アメリカの銃社会へのメッセージになる短編です。助けてくれる先輩がいるわけでもなく、切羽詰まった環境の中で自分がやり遂げられたことと、最高の評価をいただけたことが、映画監督へのステップとして大きな自信になりました。

グランプリ受賞と作品づくり

米国から帰国後、映画制作への本格的な活動を開始しました。2001年にはICC（札幌市デジタル創造プラザ）に入って作品づくりを始めました。仲間の監督たちとお金を出し合い、事務所を立ち上げたのですが、組織ができたので後は作品をつくることに集中していこうと。映画づくりに没頭し、できた作品を映画祭に応募し続ける毎日が続きました。そうした活動の中、'03年につくった短編『6:00PM』が外国の映画祭でグランプリを受賞しました。日本人では初ということで新聞記事にも取り上げていただき、映画監督としてやっていく大きな弾みになりました。

これまでに監督した映画は19本になります。僕は映画制作に対して、見てくれる人の視線で日常生活を切り取りながら、ファンタジーとユーモアを交えて感動してもらうことを心がけています。短編映画というのは、人生の中に潜む機微を短い時間の中でいかに繊細に織り交ぜていけるかが勝負だと思っています。

ショートフィルムは低予算で制作できるのが利点の一つですが、その分、作品の良し悪しがはっきり映し出されます。役者、スタッフといいチームワークをつくり上げ、皆の力が最大限に発揮できる環境をつくっていく監督力と同時に、クリエイティブにこだわって細かなところを妥協しない精神も必要です。

札幌を映像文化発信の拠点に育てたい



映画制作と並行して、ショートフィルムの普及活動とワークショップなども実施しています。映画制作をするのは東京や大阪の方が集積があり良いと思いますが、北海道には魅力的なロケ地が多く、日常を映画という物語にできる豊かな空間性をもっています。一作一作映画を撮り続けていくごとに、札幌には映像産業を育てる可能性があると感じます。問題は、札幌では映像を学ぶ機会が少ないということ。これまで、小学校の子どもたちや先生と総合学習の時間に映画づくりのワークショップをやってきました。

僕は小さいころ、小学校の作文で「映画監督になりたい」と夢を書いたのですが、「映画監督へのな

りかた」を父親に聞いても、母親に相談しても、「うーん」と困っていました(笑)。多くの場合、日本の家庭の親は映画という進路についてアドバイスができないし、子どもが映像づくりに触れる機会をつくってあげたくても、方法が分からないのかもしれない。

僕たちが始めた映像教育ワークショップでは、子どものうちに映像言語のプログラムに接して、豊かな感性を世界共通の「映画」にしていく体験を提供したいと思っています。映画監督になりたい子どもたちが、札幌で映画を学んで世界に発信していく。映画監督という夢が今より少しでも身近になればよいと思います。

この4月から、北海道情報大学で大学生にも映画制作を教えています。学生に言っているのは、行動しないと何も変わらないということ。「大作をつくりたい」と意気込まず、とにかくつくってみなさい、数多くの作品を見なさいと。映画への思いが強過ぎて、変にかしこまっても駄目です。失敗を恐れず、作りながら学んでいく、これが僕が映画を学んだ原点でもあります。

北大で始まった映画館プロジェクトにも期待をしています。クラークシアターのオープニングで映像教育についてお話をさせていただきましたが、キャンパス内で学生が映画を撮ったり、鑑賞したり、批評する機会が増えていくと、映像産業の担い手が育っていくと僕は期待しています。昨年は、『銀杏の樹の下で』という作品を、学生たちにも協力してもらってつくりました。初めての試みでしたが、プロの作品づくりに学生も一緒に参加して学んでいくことができるなんて、僕の学生時代にはなくうらやましく思います(笑)。

現在、札幌は映画の街として国際的にも知名度が上がってきています。札幌国際短編映画祭が今年3回目を迎え、多くの観客を動員しています。ショートフィルムのファンが増えることが、作り手を育てることにもつながると思います。映画づくりを支援する団体「さっぽろフィルムコミッション」の活動も年々活発になってきています。

将来、北海道から映画監督のヒーローが輩出されると素晴らしいことだと思います。僕ももちろん、映画づくりを教えながらも、どんどん意欲的に作品をつくっていきたいと思います。そして遠くない将来に、短編映画でアカデミー賞をとるのが夢です。先生が夢を持っているのって、格好良いじゃないですか(笑)。